

研究課題：マイスター・エックハルトにおける「無の論理」について

二十世紀の終盤以降、エックハルト研究は、ドミニコ会の先達であるフライベルクのディートリッヒとの思想的連関を論じる研究が盛んとなっている。その結果近年では、ドイツ語説教において語られている「魂における神の子の誕生」や「魂の根底における世界創造」、さらには「神の放下」「神の突破」といった、通常のキリスト教信仰に納まらない過激な表現は、学問的な厳密さを欠いた言説であるとする解釈が有力になっている。こういった研究状況に対して本研究は、上述の「過激な」表現がどういう内実を持ったものなのかを明らかにすることで、エックハルトの語る「神認識の能力である知性」が、ディートリッヒの語る「能動知性」とはまるで別物であるということを明らかにする。

エックハルトは、そのドイツ語説教で繰り返し語る「魂における神の子の誕生」という事態が成立する前提として「自己の完全な放下」ということを言う。自己が完全に無となったとき、初めて「魂における神の子の誕生」という事態が成立するのである。しかしエックハルトにとって「存在そのものが神」である。だとするなら、魂のうちに生まれるとされる神もまた「存在そのもの」でなければならない。ラテン語著作とドイツ語説教が共通の思想を展開しているのだとしたら、この表現が言うのは「自己が完全に無となったとき、そこに存在そのものが姿を現す」ということである。だからこそ彼は、「魂の根底において神は世界を創造する」と言い得たのである。では、自己が無となると、なぜ存在そのものが姿を現すことになるのか。この問いに答えるためには、エックハルトが求める「無」に注目しなくてはならない。彼が求める「放下」は、単なる自己の放下に留まらず、神の放下、神の突破といったことすらも求める。ドイツ語説教には「自分が存在しなかったときのよう貧」という表現があるが、それは「存在以前」「一切の存在からの離脱」を意味するのである。神は一切の存在の根源であるが、その根源すらもが消失する無が、エックハルトの求める無なのである。では、自己がそうした無にまで消え去るならば、何が起こるのか。「(神すらもない) まったくの無」にまで自己が消失するなら、そこでまさに「無ではない」という真理が露わとなるのである。と言うのも「無ではない」が真理としてあらわとなるためには、まず無が問題とならねばならないからである。「無か、無ではないのか」という（論理的に考え得る第一の）問いがあって初めて「無ではない」（という論理的に第一の真理）があらわとなる。エックハルト自身は明確にそれを言語化していないが、彼の言う（もはや神ですらない）「神の根底」「神性」は、こうした「無ではない」を意味すると考えるべきである。彼は「神は働き、神性は働かない」と言うが、上記の説明に即せば「存在は働き、『無ではない』は働かない」ということになる。「無ではない」は、論理的に考え得る第一の真理なのであるから、存在の根源とされる神すらも、それ自身のうちに「無ではない」という真理を含意していなければならない。しかし「まったく何もないこと」からは何も成立しないので、「無ではない」は働きではない。それが、「神性は働かない」と言われたゆえんなのである。

以上のように、エックハルトの語る「神認識能力としての知性（魂の火花）」は、それが無となることで「無ではない」という「神の根底」「神性」をあらわにする能力であった。つまりそれ自身は、能動的な能力ではない。一見すると両者の「知性」を巡る言説は一致する点が多いのだが、決定的な点で異なっている。エックハルトをディートリッヒから理解しようとする解釈は根本的に間違いなのである。